

JCA NEWS



Japan Communication Association (JCA) Newsletter

日本コミュニケーション学会ニュースレター



CONTENTS

1. 巻頭言	1	6. 事務局報告	23
2. 私にとってコミュニケーション学とは	4	7. 広報局便り	25
3. 2023年度 第1回理事会報告	6	8. 支部ニュース	27
4. 2023年総会議事録	14	9. マイページ登録のお願い	29
5. 学術局からのお知らせ	19	10. 編集後記	29
ジャーナルに関するお知らせ					
年次大会 発表論文・企画セッション募集					
学会賞(書籍部門)応募について					

134
2023.11

巻頭言

コミュニケーションを創る／問う

日本コミュニケーション学会広報局長 松本 健太郎 (二松学舎大学)



広報局では2020年に現体制がスタートした直後から、学会公式となる4媒体、すなわち「ホームページ」「ニュースレター」「メーリングリスト」「Twitter (現「X」)」を組み合わせた情報発信の体制を整備してきた。このうち「ホームページ」に限って数えても、現体制の発足以降、通算でじつに150件を超える記事——そこには年次大会や各支部大会の開催情報、ジャー

ナルやニュースレターの発行情報、および、その他もろもろの有意義な情報が含まれる——を掲載してきたことになる。そして内容によってはホームページ以外の媒体、すなわちメーリングリストやTwitterを駆使しながら、喩えるなら「メディアミックス」的に、会員の皆様宛にしっかりと情報を届けること、そして、学会の魅力を対外的にも伝えることを意識しながら任に就いてきたつもりである。私自身、広報局の一員としての任期が終盤にさしかかるなか、局に所属する理事の今井達也先生および宮崎新先生、そして運営委員の友池梨紗先生および齋藤光之介さんのご尽力により、いわば「コミュニケーション学会のコミュニケーション」を媒介するためのシステムをより良いかたちで更新しえたことに、感謝の気持ちを新たにしている。

さて、上述の2020年とは、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、それにより人びとの「つながり」が危機に瀕した時期に該当する。現広報局が発足する直前となる同年4月7日、高井次郎前会長の名義により「第50回年次大会開催中止のお知らせ」と題する記事が発出され、未曾有の社会的状況のなかで、学会活動も少なからず停滞を余儀なくされることになった。しかしその後、高井先生やその会長職

を引き継がれた守崎誠一先生、さらには、学術局や実行委員会の先生方のご活躍により、2021年には第50周年記念年次大会が、そして2022年には第51回年次大会が、ともに「オンライン」で開催された。幸いなことに今年から「対面」による年次大会が復活したが、いま振り返ってみるとコロナ禍とは、まさに、コミュニケーションをめぐる社会的／技術的コンテキストが著しく変容した時期だったともいえるよう。

ともあれ、新型コロナウイルス感染症が惹起した「つながりのリスク」が介在したからこそ、現広報局としては上記の仕組みづくりを急いだわけだが、私はといえば、広報局の一員としてコミュニケーションを「創る」プロセスに参画するだけでなく、急速に変化しつつあったコミュニケーション環境を勘案しつつ、それを自分なりに「問う」必要性を痛感していた。というのも、私たちの社会的活動をめぐる「オンライン／オフライン比率」をがらりと組み替えたその感染症は、「コミュニケーション」をめぐる既存の前提を根底から揺るがしつつあるようにみえたからである。私は当該の期間、すなわち2020年から現在に至るまで、『メディアとメッセージ——社会のなかのコミュニケーション』（ナカニシヤ出版）、『よくわかる観光コミュニケーション論』（ミネルヴァ書房）、『コンテンツのメディア論——コンテンツの循環とそこから派生するコミュニケーション』（新曜社）、『メディア・リミックス——デジタル文化の〈いま〉を解きほぐす』（ミネルヴァ書房）などをはじめ計15冊の出版企画に関与したが、それらには須らく、コミュニケーションをめぐる社会的／技術的文脈の変容を示唆する視座が包含されている（なお、私はこれに関連して、コロナ禍において量産された「オンライン授業」や「バーチャル観光」のたぐい、すなわち「体験の技術的合成」とでも指呼しうる構図に着眼しながら考察を展開した）。

私は最近でこそ、みずからの専門として「映像記号論、デジタルメディア論、観光コミュニケーション論」を名乗っているが、もともと大学院生時代に関心をもっていたのは、「文化のインターフェイス」とでもいいうる言語やメディアの媒介作用（mediation）に関する研究であった（インターフェイスとは接触面・界面といった意味をもつ。つまり人間は他者と、あるいは外界とかわり、文化的情報のやりとりをおこなううえで、言語やメディアといった「インターフェイス」による媒介を必要とするのである）。それに関連していえば、片や言語哲学者の丸山圭三郎は「言語」の媒介作用に着眼しながら、それによっ

て構造化される人間の意識や文化のあり方を探求していった。片やメディア論者として高名であったマーシャル・マクルーハンは「メディア」の媒介作用に着眼しながら、それによって構造化される人間の意識や文化のあり方を探求していった。私としてはそれら異質な分野の視点を接合しつつ、人間と言語との関係、人間とメディアとの関係、言語とメディアとの関係に目を向けながら、「表象動物」としての人間の本质を探求し、自分なりのパースペクティブを開拓しようとしてきたわけである。

ちなみに記号研究／メディア研究／コミュニケーション研究における基軸となるもの、すなわち「記号」「メディア」「コミュニケーション」という三つの概念は、相互に無関係ではありえない。ある見方をとれば、「メディア」は「記号」を運ぶ乗り物のごとき存在であり、他方でそれは「コミュニケーション」を仲立ちするうえで不可欠な媒介物でもある。しかしその一方で看過できないのは、これら三つの概念の関係性が時代をつうじて一定不変でありえない、という点である。じっさい、コミュニケーションを媒介するメディア・テクノロジーが発展を遂げれば、それに付随して、私たちが生きる記号世界の組成もアップデートされる。では、「デジタル革命」以後、あるいは、それをさらに加速させた「コロナ禍」以後、私たちはコミュニケーションをめぐる社会的／技術的文脈の変容をいかにして問うべきなのだろうか。

現代において「コミュニケーション」とは、おそらく、時代を語るもっとも重要な鍵語のひとつになりうると思われるし、また、そのような現況のなかで、今後 JCA が果たすべき役割はさらに大きくなって然るべきとも考えられる。時代の要請／想像力に応えるためにも、学会での知的交流をつうじて、「コミュニケーション研究」をめぐる理論的視点をいかにアップデートしていくべきか。——これに関してはぜひ今後も学会の一員として、コミュニケーションを「創る」と「問う」の双方の営為に参加しつつ、会員諸氏と議論を重ねていきたいと願っている。

私にとってコミュニケーション学とは

河合 優子 (立教大学)

アメリカの大学院でコミュニケーション学を専攻することになったのは成り行きだった。1980年代後半から90年代初頭に日本で大学生活を送ったが、大学で「コミュニケーション」という名のついた授業が開講されていた記憶はないし、自分が履修したこともない。コミュニケーション学関連科目だけではなく、あまり関係なさそうな科目にも「コミュニケーション」という名がつけられ、大学での開講科目に「コミュニケーション」が氾濫している現在とは大違いである。大学を卒業して7年ほどの社会人生活を経て大学院留学しようと決意したとき、学びたいと思っていたのはアメリカのマイノリティ文学や歴史だった。しかし、さまざまな理由から、コミュニケーション学部という選択にたどり着いたのだった。コミュニケーション学についての知識もほとんどないまま、大学院ではじめてコミュニケーション学を一から学ぶことになった。

このような経緯で学ぶことになったコミュニケーション学だが、私にとっての魅力は、対人コミュニケーションといったミクロから国家やメディアが関わるマクロのものまで幅広いものを含み、文化人類学、社会学、文学、言語学、心理学など多様な学問分野からの影響を受けていて、どのような研究テーマでもコミュニケーション研究になりうるころだった。しかし、この「なんでもあり」なところ、そして相対的に新しい学問分野であり学問的「伝統」が確立していないように見えることから、コミュニケーション学のアイデンティティが定まっていなると見られることも多い。それがこのニューズレター連載企画が登場した理由でもあるのだろう。

これは問題なのかもしれないが、同時にコミュニケーション学とは何かと問い続けなくてはならないところが、他の学問分野ではあまり見かけない良い点なのだとも個人的には思っている。基盤となる理論や概念、代表的な理論家が定まっている（ように見える）ような学問領域では、「〇〇学とは」と問うこともあまりないのではないだろうか。そういう意味ではコミュニケーション学は「伝統」が創られるまっただ中において、何十年か後には「伝統」のカッコが外れて伝統となっているのかもしれない

い。「伝統」が伝統となって自然化していない現在が、私にとっては居心地のよい状態でもあるが、「伝統」を創ろうとする営みは続いていくのだろう。

少し前にミードの『精神・自我・社会』を読み直していて、「これはコミュニケーション学の本だった」と思ったことがあったが、そのような「古典」は他にももっとあるのではないか。コミュニケーション学は制度化されて日が浅く、相対的に新しい学問領域であるため、ミードもそうだが、さまざまな学問分野で「古典」といわれる文献の著者がコミュニケーション学者と名乗っていることはない。コミュニケーション学の「伝統」を創る一つの方法として、さまざまな「古典」をコミュニケーションという視点から捉え直し、そのような「古典」をコミュニケーション学の「古典」として領有するような試みがあってもいいのかもしれない。例えば、世界思想社から社会学の「名著」を紹介した『社会学ベーシックス』という全11巻シリーズが出ているが、これを見ると社会学はどの著作を「古典」としているのかが一覧できる。そして「伝統」を創るもう一つの方法として翻訳がある。このシリーズには数多くの翻訳本も含まれている。しかし、コミュニケーション学分野で重要文献とされるものは日本語でアクセスできないことも多い。英語でも文献の内容をしっかりと理解する学部生・大学院生は一定数いるだろうが、コミュニケーション学を研究したいという学生・院生の裾野を広げるためには、日本語でより多くの文献が読めることも重要ではないかと思う。

2023年度 第1回理事会報告

日時：2023年5月27日(日) 13時～16時

会場：オンラインでの開催

参加者：15名（敬称略）

守崎、松島、宮脇、小西、日高、内藤、松本、宮崎、宮原、水島、曾澤、田島、毛利、谷口、清宮

欠席者：高永、小山、高井、今井、五島、脇

議長：守崎(会長)

司会：松島(事務局長)

書記：脇(副事務局長) ※後日、録音を確認

会長挨拶

お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。久しぶりの対面での年次大会が迫っています。天気が心配ではありますが、事務局を中心に準備を進めていただき、良い大会にできればと思っております。残り1週間、よろしくお願いいたします。

審議事項

【1】第53回（2024年度）年次大会関連

1. 守崎会長・事務局

—2024年度年次大会の開催地・日程・大会テーマについて

守崎会長より、2024年度年次大会の開催を東北支部に依頼し、引き受けていただいたとの説明があった。具体的には、東北工業大学（実行委員長：宮曾根先生）の八木山キャンパスにて、2024年6月1日（土）・2日（日）に開催予定とのことであった。

小西学術局長より、2024年度年次大会の大会テーマとして「案1：地域と記憶」「案2：地域・記憶・コミュニケーション」という2つの案が示された。曾澤東北支部長からは「ウェルビーイングとコミュニケーション」あるいは「ウェルビーイングとコミュニケーション—地域と記憶」がテーマとして提案された。

審議の結果、開催地と開催日時について承認された。また、テーマについては、事務局が中心となって7月末～8月上旬をめどにメール審議等で検討・決定することとなった。

【2】役員・監事人事について

守崎会長より、今回の人事案として、理事1名（九州支部長：清宮徹先生）と監事1名（野中アンディ先生）の説明があった。

審議の結果、いずれも承認された（監事については総会での承認が必要）。また、各局の運営委員については変更がない旨の確認がされた。

【3】各局

1. 事務局

(1) 2022 年度決算報告

宮脇副事務局長より、資料にもとづいて説明があった。

—収入の部について

主な収入である年会費は横ばいであった。2021 年度と大きく異なるのは、年次大会参加費を有料に戻した点である。

—支出の部について

大きな支出としては、ジャーナル発行費（350 部分）が挙げられる。以前 330 部程度に減らしたこともあったが、増刷が必要となり結果として支出が増大した。

他にも年次大会関係費が大きな支出となっている。ただ、2022 年度は外部委託しなかったために支出が抑えられた。参加費もいただいたので、年次大会で大きな赤字は出なかった。

事務費としては例年通り国際文献社への事務委託費が発生した。

今回新たな支出として、予備費に理事会 Dropbox 使用料が発生している。理事会議事録などの資料を、理事間で共有するためのものである。

審議の結果、以上のことが承認された。

(2) 2023 年度予算案

宮脇副事務局長より、前回（3 月の理事会）の報告からの変更点のみ説明があった。

—収入の部について

2022 年度の決算報告を受けて「前年度繰越金」を修正した。「年次大会関係費」の「広告費」「展示費」について、広報局から無料としたいとの報告があった。

—支出の部について

「年次大会関係費」の「事前参加申し込みシステム費」について、Peatix の手数料を再計算して正確な数字を反映させた。同じく「年次大会関係費」の「その他」は、Zoom での中継を行うために本部アカウント以外の有料アカウントを一か月分のみ契約した。

審議の結果、以上のことが承認された。

(3) 除名者の再入会に関する会則変更について

松島事務局長より、資料にもとづいて説明があった。

◆背景

会費滞納による除名者が、時間をおいて再入会を希望した場合の対応を決める必要がある。現在、会則にはこの対応に関する条文がない。

◆原案

- 会費滞納による除名（現行の会則第12条1）…「除名決定の翌年度から3年間再入会不可」（すなわち滞納分を入会不可期間とする）
- 会費滞納以外の除名（現行の会則第12条2・3）…「再入会不可」

◆会則の試案（※赤字部分が修正箇所）

（会員の入会・選出）

第7条 名誉会員は理事会の推薦に基づき選出される。第6条（2）～（5）項の会員になろうとする者は、本学会の目的に賛同し、所定の手続きを行ない、理事会の承認を受けなければならない。

第8条 除名された者（第12条→第13条）の再入会について、次のように定める。

- （1）第13条第1項にもとづく除名者は、原則として除名決定の翌年度から3年間再入会不可とする。
- （2）第13条第2項・第3項にもとづく除名者は、再入会不可とする。

《※以下、条文の数字が一つずつズれる》

（除名）

~~第12条~~第13条 会員が次のいずれかに該当するときは理事会の議を経て会長がこれを除名することができる。

- （1）会費を滞納したとき
- （2）本学会の会員としての義務に違反したとき
- （3）本学会の名誉を傷つけ、目的に反する行為のあったとき

なお、新会則施行以前の除名者については、そのつど会長・副会長・事務局で対応を相談する。

◆補足（別案）

ひとつの案として、未納分を一括して払う意思が再入会希望者（会費滞納による除名者）にある場合、「3年間の再入会不可」を免除する選択肢もある。その場合は、上記第8条に第3項（以下、文案）を加える。

- （3）ただし、第13条第1項にもとづく除名者が、除名後に未納分をすべて納めた場合は、残りの再入会不可期間（除名決定の翌年度から3年間）を免除する。なお、当該除名者は、再入会が認められた後も除名の事由となった未納期間中の会員の権利を請求できない。

守崎会長より、経済的な理由で3年分未納（除名）となることも考えられるので、「補足」に沿った規則を整えたい旨の意向が示された。

審議の結果、「補足」に沿うかたちで原案通りの会則変更を行うこととなった。

2. 学術局

（1）ジャーナル関係

—執筆要領について

内藤副学術局長より、執筆要領の第5条（体裁）の5)について説明があった。英文に合わせ、日本語に「アブストラクトは英語で300語以内で書くこと」「表題は日本語と英語で書くこと」を追記したい、とのことであった。

審議の結果、承認された。

日本語文 第5条（体裁）

5) 原稿は題名、氏名、所属、アブストラクト、本文、註、引用文献、付録から構成される。アブストラクトは、英語で300語以内とする。また、表題は日本語と英語で書くこと。

(※赤字部分が追記箇所)

英文 Article 5: Size

5) The article should consist of a title, affiliation, name(s) of the author(s), abstract, text, notes, references, and appendices. The abstract must be written within 300 words in English. The title of a Japanese article has to be written both in Japanese and English.

(※下線部分が日本語文と対応する箇所)

3. 広報局

(1) 広告収入獲得に向けた検討の枠組みについて

松本広報局長より、年次大会におけるプログラム広告と出版社ブースに関して提案があった。これまで年次大会においては、プログラム広告と出版社ブース出展から収入を得ていた。一方で、プログラムの電子版移行やオンラインでの大会開催など、ここ数年で状況に変化があった。久しぶりの対面開催を機に、学会の広告収入のあり方を再考してはどうか、とのことであった。

審議の結果、ワーキンググループ（主に広報局＋学術局）にて検討することとなった。

【4】各担当理事

1. 理事会運営担当

(1) 会長選挙について

宮原理事（理事会運営担当）より、ワーキンググループでの検討結果にもとづいて、会長選挙に関する提案があった。提示された原案は次の通りである。

— 「次期」会長は選挙で選ぶ

守崎会長に二期目を務める意思があるかについても考慮に入れる必要があるが、以下の3つの選択肢がある。

1. 現会長の任期終了時（2024年）において選挙を実施する。下記の方法で現会長が推薦された場合、現会長も候補の一人として扱う。
2. 2024年の任期終了時には選挙は行わず、2026年に導入する。
3. 現会長が二期目継続の意思が十分でない場合（要確認）は2024年に導入する。

2024年に別の候補を挙げずに「信任投票」を行うという考え方もあるが、現会長が就任した時点では考えていなかった方法を取り入れることは公正ではない。2023年の年次大会総会（選択肢1）、あるいは2025年の年次大会総会（選択肢2）において、会長選挙の実施と要領を発表する。

—会長の任期は年次大会終了時から2年間

現在は会計年度と合わせて4月1日を就任・退任時期としている。しかし、4月前後は論文募集や年次大会の開催準備期間でもあり、4月1日就任・退任には難点がある。このため、年次大会を就任・退任の機会としたい。なお、この任期変更は会長を含めた役員全員に適用される。

—会長候補は支部から選出してもらい、同時に公募制も取り入れる

各支部（当該支部に所属する会員の中）から候補を一名選出してもらおう。ただし、「候補者なし」という回答も認める。また、公募制も併用する。推薦人5名以上によって推薦された会員を候補とする。

—候補者は「抱負」を提出した段階で正式に候補者となる

被推薦者は「会長に選ばれた際の抱負」を学会事務局に送付することによって、会長に推挙された場合受諾する意思があることを明らかにし、正式な候補者として認められる。

—候補者の中から理事会で審議、決定する

候補者多数（4名以上）の場合は理事会で予備選挙を行い、3名以内の最終候補者の中から、理事会での審議・投票によって会長を決める。

—スケジュール

通例12月初旬開催の理事会までに候補者を出してもらおう。必要であれば予備選挙を行い、3月の理事会で最終的に決定する。

- 6月 選挙を実施することを告示
- 11月 支部候補者、公募制候補者届
- 12月 理事会で確認
- 1~2月 予備選挙
- 3月 理事会決定
- 6月 就任

守崎会長より、できるだけ早い制度導入が望ましいので、1期目終了時（2024年）に選挙を実施するのがよい旨の意向が示された。

審議の結果、原案通り承認された（選挙は2024年就任の会長からスタート）。選挙管理委員会の設置については、選挙実施の際に改めて審議することとなった。

報告事項

【1】第52回（2023年度）年次大会関連

1. 学術局

小西学術局長より、次のことが報告された。

—参加費と懇親会（費）についての確認事項

Peatix での参加申し込み締め切りを過ぎると、当日に会場で申し込んでいただくほかなくなるので注意いただきたい。

—学術講演・シンポジウムについて

講演：演題「議論できる AI の可能性と課題：ChatGPT の時代から考える」

講演者 山口高平（神奈川大学情報学部教授）

司会 小西卓三（昭和女子大学）

シンポジウム：「AI とコミュニケーション」

登壇者 山口高平・鈴木志のぶ（北海道大学）・山田晴道（東京経済大学）

司会 大橋理枝（放送大学）

なお、立教大学異文化コミュニケーション学部後援となっている。

—懇親会

久しぶりの対面開催ということもあり、全会員対象の懇親会にどれぐらいの参加が見込まれるのかが不透明である。感染症への警戒も考慮して、今年度は理事とシンポジウム登壇者のみを対象とした。

—出版社ブース（広報局）

九夏社、春風社 2 社が出店予定である。

—今後の大会に向けての確認・引き継ぎ事項

年次大会に関する業務担当について、今後の課題もあわせて確認・引き継ぎをしておきたい。

【2】各局

1. 事務局

（1）入退会者報告

松島事務局長から、現在の会員数と入退会者について報告があった。2023 年 5 月 22 日時点での会員全体数は 290（一般会員：268 名、学生会員：19 名、準会員：3 名）との報告があった。

2. 学術局

（1）ジャーナル関係

内藤副学術局長から、次のことについて報告があった。

—第 52 巻第 1 号の状況について

前回理事会で承認・報告の通り、4 本が掲載予定である。7 月末発行に向けて準備中であり、5 月 20 日に国際文献社に入稿済みである。

—第 52 巻第 2 号の状況について

再投稿が 1 本、新規投稿は 2 本であった。再投稿についてはすでに査読済みであり、掲載不可という結果であった。新規投稿については、現在査読中である。

—第 53 巻第 1 号について

ホームページと会員へのメールにより原稿募集中である。現在のところ、投稿はまだない。

3. 広報局

(1) ニュースレター133号の発行とニュースレター134号の予定

松本広報局長より、ニュースレター133号（2023年5月号）が発行され、次号となる134号は2023年11月に発行予定との報告があった。

(2) HPへの掲載情報

宮崎副広報局長より、以下の情報が学会HP【ニュース】に掲載されたとの報告があった（前回理事会～2023年5月17日、8件）。

- ・2023年05月17日【ニュース】教員募集のお知らせ（名城大学法学部）2023年8月23日（水）
必着
- ・2023年05月11日【年次大会案内】[updated] 第52回年次大会「AIとコミュニケーション」
2023年6月3日（土）、4日（日）プログラム&プロシーディングス
- ・2023年05月09日【ニュース】石川県能登地方を震源とする地震で罹災された皆さまへ
- ・2023年04月25日【ニュース】教員募集のお知らせ（名古屋市立大学人間文化研究科）2023年7月3日（月）必着
- ・2023年04月06日【ニュース】電気通信普及財団 2023年度上半期助成・援助公募情報のお知らせ
- ・2023年04月05日【ニュース】『日本コミュニケーション研究』第53巻第1号論文募集のお知らせ
- ・2023年04月03日【ニュース】【九州支部より】九州支部ニュースレター第40号を発行しました。
- ・2023年03月16日【ニュース】「2024年度フルブライト奨学金募集開始」募集開始のお知らせ（～5月15日23:59（オンラインで受付））

(3) ML/Twitterでの情報発信について

松本広報局長より、次の報告があった。

- ・HP掲載情報のうち、会員向けに共有すべきものに関してはMLにて配信をおこなっている（前回理事会以後6件）。
- ・HP掲載情報、およびそれ以外の情報（会員の新刊情報等）を含め、学会公式Twitterをつうじて発信をおこなっている（前回理事会以後1件）。

(4) 第52回年次大会におけるプログラム広告・出版社展示ブースについて

松本広報局長より、プログラム広告については無し、出版社展示ブースについては九夏社と春風社が出店予定（いずれも2日間）との報告があった。

(5) 旧ウェブサイトに関連する問題について（支部ウェブサイト関連）

松本広報局長より、学会の旧ウェブサイトに関して報告があった。本学会が使用してきた旧ウェブサイトのドメインが闇サイトの業者によって取得され、そこにアクセスしようと試みると、問題のあるサイトに誘導されることが判明した（ここまで前回理事会にて報告済み）。

これに関して、新たに支部ウェブサイトに関連する問題が判明したので、ウェブサイトを保有する各支部（支部長）に注意喚起をした。

また、旧ウェブサイトにはリンクをはっている出版社に対して、旧URLの削除依頼を出しているとのことであった。

【3】各支部報告

各支部報告を参照。

【4】次回理事会開催日時・会場

今回は2023年10月7日（土）午後1時から、オンライン開催。

2023 年度総会議事録

日 時：2023 年 6 月 3 日 (土) 14 時 30 分～15 時 15 分
会 場：立教大学 (7102 教室)。一部オンラインとのハイブリッド。

参加者：26 名、委任状 100 通

議長：森泉 哲 先生
司会：松島 (事務局長)
書記：脇 (副事務局長)

1. 開会の辞・会長挨拶

司会の松島事務局長より開会が宣言された。続いて、守崎会長より次のような挨拶があった。今年度の年次大会は久しぶりの対面開催となったが、荒天のため参加予定に変更が生じている方もいらっしゃると思う。こうした状況下ではあるが、盛会となるよう盛り上げていただきたいとのことであった。

2. 大会実行委員長挨拶

師岡大会実行委員長より、挨拶があった。東京では台風のピークも過ぎたようで、学术交流はもちろんのこと、食事なども含めて参加者間の交流を深めていただきたい。この 2 日間でみなさんにとって充実したものとなるよう、実行委員・スタッフ (院生・学部生) 一同全力を尽くしたい。また、2 階に談話室・休憩室を設けてお茶菓子などを準備しているのでご利用いただきたい、とのことであった。

3. 学会賞授与

まず小西学術局長より 2022 年度学会賞・奨励賞の報告があり、守崎会長から賞状等が授与された。

論文の部：該当なし

書籍の部：毛利雅子.2022.『法廷通訳翻訳における言語等価性維持の可能性：現場から問う司法通訳翻訳人の役割と立場』丸善プラネット

奨励賞：該当なし

上記書籍の主な授賞理由として、法廷通訳 (者)・翻訳 (者) に関する実情を紹介し、事例を通して法廷での通訳実践を検討することで、「意味の等価性」の重要さとその深い理解を促している点が挙げられた。また、法廷での通訳実践の改善に向けた提言と、コミュニケーション研究の関連諸領域に貴重な一次資料を提供している点も、高く評価できるとのことであった。受賞者から、今後もコミュニケーション学の発展のために貢献していきたい旨の受賞挨拶があった。

続いて、第 52 回年次大会実行委員長であった高井次郎先生 (名古屋大学) に感謝状が贈呈される予定であったが、荒天のために高井先生の到着が遅れており、後日改めて贈呈されることとなった。

4. 議長・書記選出

森泉哲先生が議長に推薦され、承認された。

まず森泉議長より、会則 38 条では「会員現在数の 5 分の 1 以上の出席」が議決の条件であることが確認された。それに基づき、現時点における会員数 290 名の内、総会出席者 26 名、委任状 100 通の合計 126 名 (会員数÷5=58 名以上) で、総会が成立したことが確認された。また、協副事務局長の書記就任が承認された。

5. 役員人事案について

守崎会長より、資料に基づいて、理事会にて選出され会長が承認した 2023 年度の役員人事が発表された。今回の改選は、次の通りである (敬称略：所属は総会時のもの)。

理事 (九州支部長) : 清宮徹 (西南学院大学)

また守崎会長より、新体制における監事選出について、任期終了を迎える藤巻監事に替わって野中アンディ先生 (コミュニケーションスキル協会) の就任が提示された。なお、もう 1 名の監事は川内規会先生 (青森県立保健大学) が引き続き務める。これらの監事の人事について審議され、承認された。

6. 2022 年度事業報告・2023 年度事業計画について

守崎会長より、資料に基づいて下記の通り 2022 年度事業報告があった。

- ・年次大会の開催：第 51 回年次大会「危機とコミュニケーション」 (大会実行委員長：高井次郎先生、オンライン開催)
- ・支部大会等の開催
- ・ジャーナルの発行
- ・ニュースレターの発行

引き続き、守崎会長より下記の通り 2023 年度事業計画の説明があった。

- ・年次大会の開催：第 52 回年次大会「AI とコミュニケーション」 (大会実行委員長：師岡淳也、立教大学)
- ・支部大会等の開催
- ・ジャーナルの発行
- ・ニュースレターの発行

審議の結果、すべて承認された。

また、守崎会長より 2024 年度 (第 53 回) 年次大会に関する告知があった。会場校は東北工業大学で、日程は 2024 年 6 月 1 日 (土)・2 日 (日) を予定している。大会テーマについては「地域」「記憶」「ウェルビーイング」に関する内容で、学術局を中心に検討中である。基調講演者の決定とともに大会テーマの周知もできればと考えているとのことであった。続いて、宮曾根美香先生 (東北工業大学) から年次大会に向けた挨拶があった。

7. 会長選挙について

宮原理事（理事会運営担当）より、会長の選出方法について、次期会長から選挙を実施する旨の報告があった。

- ・目的：学会運営の透明性を高め、会員の関心と関与を高める。
- ・会長任期：年次大会終了時から2年間
- ・方法：①支部から候補を推薦・公募制併用
②被推薦者の「抱負」提出—正式候補
③候補者多数（4人以上）の場合—予備選挙（理事会）
④本選挙（理事会）

まず「目的」について、これまでの会長選出に問題があったということではなく、会長選出過程の透明性を高め、会員がより積極的に学会運営に関わるための方策であるとのことであった。

「会長任期」は、現在、会計年度に合わせて4月1日を就任・退任時期としている。しかし、4月前後は論文募集や年次大会の開催準備期間でもあり、4月1日就任・退任には難点がある。このため、年次大会を就任・退任の機会としたい。なお、この任期変更は会長を含めた役員全員に適用される。会計年度は現状のままである。

「方法」については、①各支部（当該支部に所属する会員の中）から候補を一名選出してもらう。ただし、「候補者なし」という回答も認める。また、公募制（推薦人5名以上によって推薦された会員を候補とする）も併用する。②被推薦者は「会長に選ばれた際の抱負」を学会事務局に送付することによって、会長に推挙された場合受諾する意思があることを明らかにし、正式な候補者として認められる。③④候補者多数（4名以上）の場合は理事会で予備選挙を行い、3名以内の最終候補者の中から、理事会での審議・投票によって会長を決める。

選挙スケジュールは次の通りである。

- 2023年6月：選挙実施を告示
- 2023年11月：支部候補者、公募制候補者届
- 2023年12月：理事会で候補者を確認
- 2024年1～2月：予備選挙（候補者が4名以上の場合）
- 2024年3月：本選挙、決定
- 2024年6月：就任

本学会初の試みであるため、2024年度から就任の会長選挙は現行の会則のまま運用し、会則の変更は来年度以降とするとのことであった。

8. 事務局からの報告・審議事項

① 2023年度の業務委託契約について（報告）

松島事務局長より、資料に基づいて、2023年度も引き続き国際文献社と業務委託契約を行った旨の報告があった。業務委託の主な内容としては、「会員管理」「会費請求・受付」「会計業務」「ジャーナル印刷・発送（年2回）」「年次大会関連業務」がある。また、今年度から反社会的勢力と無関係であることを確認する記述が契約書に加わった。

② 2022年度決算報告・2023年度予算審議

宮脇副事務局長から、資料に基づき、2022 年度決算報告がなされた。

—収入の部

- ・主な収入である年会費は横ばいであった。2021 年度と大きく異なるのは、年次大会参加費を有料に戻した点である。

—支出の部

- ・大きな支出としては、ジャーナル発行費（350 部分）が挙げられる。
- ・他にも年次大会関係費が大きな支出となっている。ただ、2022 年度は外部委託しなかったために支出が抑えられた。参加費もいただいたので、年次大会で大きな赤字は出なかった。
- ・事務費としては例年通り国際文献社への事務委託費が発生した。
- ・支部活動助成金については、支部大会をオンラインで開催した支部が多かったために、支出が少なくなっている。

—監査報告

藤巻監事より、厳正な監査を行った結果、適正な会計処理が行われていた旨の報告があった。

以上のことについて、すべて承認された。

続いて、宮脇副事務局長より、資料に基づいて 2023 年度予算の説明があった。昨年度との主な差異は次の通りである。

—収入の部

- ・「年会費」については保守的に見積もった。
- ・「年次大会関係費」には「参加費」が計上されている。また、立教大学より助成金をいただいた。

—支出の部

- ・年次大会を外部委託（国際文献社）しない初の対面開催となった。これにより赤字が大幅に解消される見込みである。
- ・「支部活動助成金」については例年通り計上しているので、事務局会計（宮脇）までご連絡いただきたいとのことであった。

以上のことについて、すべて承認された。

9. 広報局報告

松本広報局長より、まず広報局からの情報発信について報告があった。

- ①ニュースレターの発行：第 131 号～第 133 号を発行した。
- ②ホームページによる情報掲載：昨年度の総会以降 44 件の情報を掲載した。
- ③メーリングリストによる情報提供：昨年度の総会以降 49 件の情報を提供した。
- ④Twitter による情報発信：①～③とも連動して様々な情報を発信した。現在フォロワーが 69 名。会員のみなさまにはぜひフォローをお願いしたい。

続いて、旧ウェブサイトに関連する問題について報告があった。学会の旧ドメインが闇サイト業者によって取得され、現在、旧サイトにアクセスしようとする問題のあるページにつながってしまう。旧ドメインを取り戻すことは困難であるため、このまま放置せざるを得ない。旧ウェブサイトの URL をリンクとして載せた媒体がまだあるかもしれないが、アクセスしないようお願いしたい。

10. 閉会の辞

森泉議長より議事の終了が宣言されたのち、松島事務局長から参加者への御礼と総会の終了が宣言され散会となった。



学術局からのお知らせ

ジャーナルに関するお知らせ

『日本コミュニケーション研究』(Japanese Journal of Communication Studies)は、同一巻の第1号と第2号を同一年度内に発行できるように調整し、第52巻第1号が2023年7月に発行されました。第2号は、2024年1月発行にむけて編集作業を進めております。研究論文に加え、第52回年次大会の論考が掲載予定となっております。また、第53巻第1号への投稿が9月末に締め切られ、新規投稿7本、再投稿4本の論文が投稿されました。こちらは2024年7月発行を目指し、その後の作業が進められています。

現在は、第53巻第2号(2025年1月末発行予定)への投稿論文を募集中です。締め切りは2024年3月末日ですので、是非皆さまの研究結果を論文としてご投稿ください。投稿は、ワード等で作成された「論文」「シノプシス」「ファイル作成に使用した機種を加えた著者情報」の3つのファイルを添付して、以下の指定メールアドレスに送付するという形でお願いいたします。投稿や執筆の詳細につきましては、公式ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照ください。投稿される際は、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付をお願いいたします。

メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]caj1971.com

CC: itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の内藤(itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp)までご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

2023年度ジャーナル『日本コミュニケーション研究』掲載論文

『日本コミュニケーション研究』第52巻第1号(2023年1月発行)

研究論文

埴 幸枝：戦後「ぼやき漫才」と社会規範—当時の視点/現在の視点からの分析—

花木 亨：アメリカ合衆国大統領選挙の敗者はどのように振る舞うべきか—ジョン・マケインの敗北演説をめぐる考察—

佐々木 由美：日本人大学生の対面会話における「不安」感情とその関連要因の検討—初対面会話と友人会話における比較—

王 令薇：テレビの／に映った「裏領域」をめぐる—NHK『中学生日記』のメディア論—

今後も充実した『日本コミュニケーション研究』の発行に努めてまいりますので、皆さまからのご投稿、ご協力をお願い申し上げます。

(副学術局長：ジャーナル担当 内藤 伊都子)

第53回年次大会 発表論文・企画セッション募集

2024年に開催される第53回年次大会の発表論文・企画セッションを募集いたします。以下をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

【大会開催要項】

- 日程 2024年6月1日(土)・2日(日)
- 場所 東北工業大学八木山キャンパス(東北支部開催)
- テーマ 「地域と記憶」

【募集内容】

- 応募締切 2024年2月1日
 - 申し込み方法 メールにて申し込み。添付書類として、プログラム掲載用要旨(「要旨」)、プロシーディングス用原稿(「原稿」)を送付する。添付書類作成の際には、学会HPに掲載するひな形を必ず使用すること。ひな形を使用していない場合、修正・再提出が必要となる。
 - 応募・問合せ先 副学術局長 日高勝之(大会担当、立命館大学)
MAIL: k-hidaka[@を入れる]wa2.so-net.ne.jp
- 募集①「研究発表」：質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提とした研究発表。
- 募集②「パネル発表」：統一テーマについての90-120分程度の研究発表。
- 募集③「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90-120分程度の自由企画。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、模擬講義など。その他の企画案も可能で、学術局にご相談のこと。

○応募資格

「研究発表」：

1. 単独発表の場合はJCA正会員であること。
2. 共同発表の場合、筆頭著者がJCA正会員であること。
 - 2.a. 筆頭著者が正会員(一般会員)である場合、著者の半数以上が学会員であること。
 - 2.b. 筆頭著者が正会員(学生会員)である場合は2.a.の条件は当てはまらない。

3. 共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
- 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
- 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a.の条件は当てはまらない。
4. 研究発表を行う JCA 正会員は申込時に 2023 年度までの会費を納入していること。

「パネル発表」：

1. 司会が JCA 正会員であること。
2. パネルにおける発表が単独発表の場合は、発表者は JCA 正会員であること。
3. パネルにおける発表が共同発表の場合、筆頭著者が JCA 正会員であること。
- 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。
- 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a.の条件は当てはまらない。
4. パネルにおける発表が共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
- 4.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
- 4.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 4.a.の条件は当てはまらない。
5. パネル発表にて発表を行う JCA 正会員は申込時に 2023 年度までの会費を納入していること。

「企画セッション」：

司会が JCA 正会員であること。JCA 会員以外が参加する場合は、応募の際に参加者としてふさわしい理由と参加の正当性を明記すること。JCA 会員は申込時に 2023 年度までの会費を納入していること。

発表の採否の連絡は 3 月下旬頃を予定している。なお、パネル、企画セッションについては、特別な理由があって早い時期の採否連絡が必要な場合は、その理由を応募の際に明記すること（ただし早期の採否の連絡が確約されるわけではない）。

学会賞（書籍部門）応募について

- ・ 対象：本学会正会員によるオリジナルの著作のうち、過去5年間に応募していないもの。共著・分担執筆作品は、全執筆者がJCA 会員でなくともよいが、著作へのJCA 会員の貢献が顕著と認められるもの。
- ・ 締め切り：2023年12月31日(消印有効)
- ・ 応募資格：JCA 正会員(2023年度までの会費を納入していること)
- ・ 応募方法：審査用の著書3冊、および100字程度の著作概略および著者の名前・連絡先情報（著書の返却はなし）
- ・ 応募数量：会員一人一冊(自薦、他薦問わず)
- ・ 問い合わせ先：下記2名に同報送信
学術局長 小西卓三 tkonishi[@を入れる]swu.ac.jp
副学術局長 内藤伊都子 itnaito [@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp
- ・ 審査書類一式提出先：学術局長 小西卓三
住所：〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57
昭和女子大学 英語コミュニケーション学科
電話：03-3411-5403
ファックス：03-3411-6404
E-mail: tkonishi[@を入れる]swu.ac.jp

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. 2023年度JCA総会が6月3日(土)に、立教大学会場での開催とオンライン配信を組み合わせ、ハイブリッド形式で開催されました。台風の影響による総会開催形式の変更にご対応、ご協力いただいた会員の皆様に心よりお礼申し上げます。

2. 会費納入のお願い

年会費の振込用紙を4月にお送りしました。未納の方はお早めにお振込みくださいますようお願い申し上げます。

3. 学生会員・準会員登録申請締め切り

大学院生対象の学生会員、学部生対象の準会員としての登録は7月末日をもって締め切りました。前年度学生会員または準会員であった方で、新たに登録をされなかった方は自動的に一般会員に切り替えますのでご了承ください。なお、すでに今年度の学生会員または準会員の会費を振り込み済みで登録をされなかった方には差額を請求させていただきます。

4. マイページの利用開始について

2019年12月から「マイページ」(会員情報管理システム)が利用できるようになっていきます。マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しいHPの右上のバナーからログインできますので、できるだけ早い時期にアクセスしていただき、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要なIDとパスワードは、年会費の請求書と一緒にお送りしております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なさった場合には、日本コミュニケーション学会事務局(以下「学会事務局」とする)までお問い合わせください。

問い合わせ先：日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

5. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会HPにある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

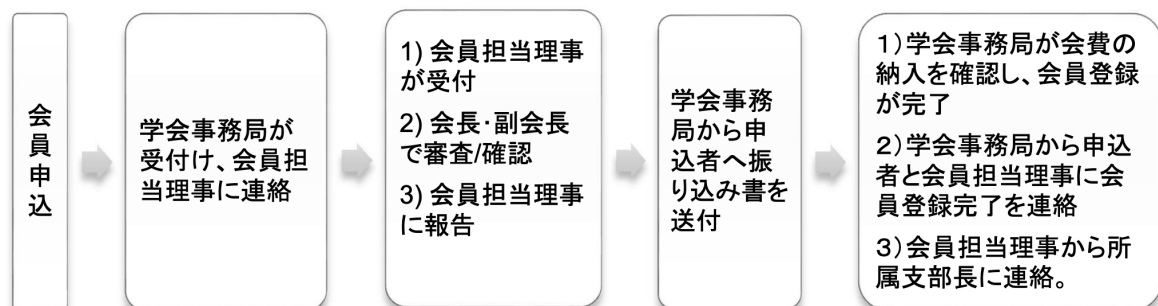
6. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システム J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) や CiNii Research (<https://cir.nii.ac.jp/?lang=ja>) にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

7. 新規会員の手続き

JCA では新しい会員を随時受け付けています。下記のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がありましたら、学会事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



広報局便り

1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 Twitter(@jca_1971)およびML で発信・配信していきたいと考えております。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 Twitter 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。それらが届いているかをご確認いただいたうえで、もし不達の場合には、JCA ニュースレター今号 xx ページのご案内をご参照いただき、マイページへの登録手続き/メールアドレスの更新をお願いいたします。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸いです。
- ⑤ JCA 公式 Twitter(@jca_1971)も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 松本健太郎)

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：今井達也 (imatatsu.jca[@を入れる]gmail.com)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース

北海道支部

(支部長 水島 梨紗)

共感のことば

北海道支部の活動では、形式がはっきりした「研究会」「研究大会」といった場の他に、敷居の低い少人数での談話も重視しています。事前にテーマを決めることもありますが、ほんの思いつきから話題が広がったり、深まったりすることもあり、コミュニケーションの楽しさを味わう機会となっています。

ある日、事務連絡がメインのメールの最後に「最近気になることば」を蛇足のように書いてメーリングリストに送信しました。あくまで個人的に気になっているというレベルで、次のことばを例示しました。それは、ある発言に対して「そうなんですか」ではなく、「そうなんですか」と返されることの印象です。たった1文字の違いですが、受ける印象は随分違う。気になっているのは自分だけだろうが、ほかの方はどう思うのか、ちょっと反応を見てみたいという軽い気持ちでした。

すると、このメールに対してさほど時間をおかずに支部内の先生から「大いに共感するところあり」と返信がありました。以下、その先生からのメール文を引用します。

昨日の介護面接相談の実技演習ロールプレイでも、学生たちは「そうなんですか」を連発し、それをもって「共感を示す言葉として意識して言った」と言う。それは良く言って「消極的共感」であり、「共感していない」と受け取られることもある表現だと言うと、怪訝そうにする学生が何人もいました。

「言語は流転する」ので、もしかするとその説明は、もうすでに現代日本語ではなく、近代日本語

の説明になってしまったのかもしれませんが、果たしてどうか。(引用終了)

「そうなんですか」に違和感をもつのは自分だけではないようだ。やはり、気になった言葉については、支部メンバーに聞いてみるのがいい、と安心しました。

さらにそのメールには次の文が続きました。ぜひ議論させていただきたく、場を作りたいと思います。今から年内は難しいと思いますので「年度内」でミニ研究会あるいは研究サロンをオンライン開催する方向で、これから検討させていただきます。

ちょっとしたことばを題材に、ああでもないこうでもないとする秋の夕べが待ち遠しいです。

東北支部

(支部長 會澤 まりえ)

東北支部では、例年通り支部研究大会を12月2日(土)午後オンライン(Zoom)で実施する予定です。支部創立30周年記念事業の一つ目として創立記念誌を今年3月に発行しましたが、同事業の二つ目として支部研究大会で会長の守崎誠一先生(関西大学)に最初の1時間ほど特別講演を行って頂く予定です。その後、通常の研究発表を数本予定しています。研究発表申し込みは會澤宛11月3日(金)までです。また、当日ご参加を希望される方は、支部長の會澤 [aizawa[@を入れる]shokei.ac.jp] までご連絡いただければ Zoom ミーティングの URL とプログラムをメールにてお知らせ致します。詳しくは東北支部ブログをご覧ください(<http://tohokucaj.jugem.jp>)。



中部支部



(支部長 毛利 雅子)

2023年9月30日(土)、愛知淑徳大学にて中部支部大会を開催しました。今回は、「『文化』から考える団塊世代」と題したパネルディスカッションを実施、問題提起者として、日高勝之先生(立命館大学)と藤巻光浩先生(フェリス女学院大学)、またレスポナント(討論者)として埴幸枝先生(成城大学)をお招きしました。非常に密度の濃い深いディスカッションが行われ、有意義な時間となりました。

次回は、2024年3月に例会・大会を開催する予定です。



関西支部



(支部長 小山 哲春)

関西支部では、2023年11月11日(土)に関西支部大会を対面で開催いたします。基調講演に脇忠幸先生(関西学院大学ハンズオン・ラーニングセンター准教授)をお招きし、「高等教育における「学び」とコミュニケーション能力」というタイトルでお話いただいた後、同テーマで1時間程度のディスカッションを予定しております。

日時：2023年11月11日(土) 14:00-17:00

会場：関西大学梅田キャンパス(対面)

参加申し込みフォーム：

<https://forms.gle/cptKzWy1aitmRFx48>

対面での懇親会も予定しておりますのでぜひご参加ください！



九州支部



(支部長 清宮 徹)

九州支部の支部大会についてお知らせします。今年度は九州支部設立30周年の記念の年となります。この記念すべき支部大会を、2023年11月25日(土)に西南学院大学において開催いたします。久しぶりに対面を中心に実施しますが、ハイブリッドでの参加も可能にいたします。今大会では、テーマを「現代社会の分断とコミュニケーション」といたしました。基調講演は、先般翻訳が刊行された『差別と資本主義：レイシズム・キャンセルカルチャー・ジェンダー不平等』のお二人の翻訳者、眞下弘子先生(西南学院大学外国語学部教授)と伊東未来先生(西南学院大学国際文化学部准教授)をお願いしております。世界各地で現象化し議論されている差別、格差、正義、文化、ジェンダー、不平等、アイデンティティ、植民地主義など、多面的に議論して参ります。またテーマ以外にも、いろいろな研究発表が報告される予定です。ご関心のある方は、ぜひご参加ください。プログラムなど詳しくは、九州支部ホームページをご参照ください。

日時：2023年11月25日(土) 午後

会場：西南学院大学コミュニティーセンター& Zoom(ハイブリッド)

大会テーマ：現代社会の分断とコミュニケーション

基調講演：眞下弘子先生(西南学院大学外国語学部教授)と伊東未来先生(西南学院大学国際文化学部准教授)

ホームページ：<http://kyushujca1971.com/>

連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Tel: 03-6824-9372

Fax: 03-5227-8631

[jcom-post@\[@を入れる\]as.bunken.co.jp](mailto:jcom-post@[@を入れる]as.bunken.co.jp)

マイページ登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

1. マイページの利用開始について

マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、**できるだけ早い時期にアクセスしていただき、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。**マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒に送っております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なさった場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局
jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

編集後記

実は現在アメリカはテキサス州でサバティカルをしております。アメリカに滞在していると、よく以下のような発想に出会います。「個々一つ一つは違って当然であり、その違いこそが誇らしく思うべきものである」という考え方です。「みんなで同じ方向を向いて協力しよう」という日本らしい考え方は、ある場面では力を発揮しますが、違う場面では人々を窮屈にさせると感じます。自分が日本のコミュニケーション学のあるべき形を考えた時に、何か一つにまとまらないといけないようなイメージを持っていたのですが、それはある意味この学問を窮屈にさせるのではと考えるようになりました。今回の NL を俯瞰して、河合先生が「私にとってコミュニケーション学とは」で書いてくださったこの学問の学際性や、各支部が「地域」に根ざしたコミュニケーション学を議論する場を設けている取り組み等、ある意味日本のコミュニケーション学はその在り方を活かして発展してきているのだと実感しました。あとはこの強みを「外」に向けてどうコミュニケーションしていくかを検討し、日本社会が多様な人にとって生きやすい環境にしていくために学会としてどう貢献できるか、深く検討していく段階なのではと考えます。

広報局 ニュースレター担当 今井 達也